

日本最古の人類の姿が分かる？ 長野・香坂山遺跡で「ホモサピエンス」の石器がザクザク

毎日新聞 2020年8月28日 14時00分（最終更新 8月28日 14時00分）

伊藤和史



香坂山遺跡で発掘された大型の石刃（左の2点）と大型の尖頭器（右の2点）。左から2番目の黒曜石の石刃は折れていた。スケールは1目盛りが1センチ＝国武貞克氏提供

日本列島で人類の歴史が始まった時、その最初の姿はどのようなものだったのだろうか？

この、考古学・人類学の一大テーマに答えを出す可能性のある旧石器時代の遺跡が現れ、研究者の関心が高まっている。長野県佐久市の香坂山（こうさかやま）遺跡である。出土した石器を見ると、アフリカを出てユーラシア大陸を西から東へと拡散していった現生人類（ホモサピエンス＝新人）の大きな流れが、まさにそのまま直結した形で日本列島に姿を現したかのようなのだ。

国武貞克・奈良文化財研究所主任研究員をリーダーとする研究グループが8月初めから調査している。

日本列島では約3万8000年前、大陸から新人が渡ってきて、人の歴史がスタートしたと考えられている。世界的な考古学の枠組みでは、後期旧石器時代と呼ばれる時代だ。それよりも前に人が住んでいたかどうか、つまり、日本列島にも前期・中期の旧石器時代が存在したかどうかについては、ちょうど20年前に発覚した発掘捏造（ねつぞう）事件も絡んで、議論が分かれている。こうした事情から、研究者が一致して存在を認めるのは3万8000年前以降の時代であり、その最初がどのような状況だったのかが、旧石器時代研究の最大関心事の一つなのである。

日本列島で最古の「石刃」遺跡

香坂山遺跡は実は、1997年に一度発掘されている。



発掘中の香坂山遺跡。後方の円筒形の建物は上信越自動車道・八風山トンネルの排気施設＝長野県佐久市で2020年8月19日、伊藤和史撮影

浅間山の東南約15キロ、八風山（はっふうさん）山麓（さんろく）南側の標高1080メートルの地点に位置する。群馬県境に近い。上信越自動車道の八風山トンネルの建設工事に伴って発見され、長野県埋蔵文化財センターによって調査が行われた。

その時、後期旧石器時代を特徴づける石器製作技術である「石刃（せきじん）」技法でつくった石器などが見つかった。石刃技法とは、石器になる原石を他の石などでたたいて割り、ナイフのような鋭い刃をもつ縦長の素材を効率よく獲得する技術である。

当時、同時に出土した炭化物の放射性炭素年代測定によって、遺跡の年代は3万6000年～3万5000年前とわかった。この年代は、石刃が出土した遺跡として国内最古とされている。

ただ、年代測定の技術進歩はめざましい。最初の発掘から20年以上たっているため、国武氏は今回、さらに精度の高い年代測定を念頭に発掘を思い立った。「墨粒（炭化物）が取ればいいな」と臨んだわけだ。

大小の石刃、尖頭器がザクザク出土 ユーラシア大陸と同じ

ところが、3週間足らずの間に、望外といえる収穫が連続することになった。



香坂山遺跡で見つかった小型の石刃（左側の小さな5点）。黒曜石製で長さ1～2センチ。安山岩製の小型石刃は3～4センチともっと大きい。右の2点は黒曜石製の大型石刃。スケールは1目盛り1センチ＝長野県佐久市で2020年8月19日、伊藤和史撮影

出土した石器は約400点。中でも注目されるのが、長さ10センチを超えるものも含む大型の石刃と、長さ3～4センチほどと小さくて薄い小型の石刃の2種の石刃。大型石刃は97年の調査でも発掘されたが、この時代の小型石刃が見つかったのは初めてのことだ。さらに、尖頭器（せんとうき）と呼ばれる先のとがった大型の石器も見つかった。

この3種の組み合わせが日本列島で見つかったこと自体が初めてなのだが、興味深いのは大陸で発掘された石器との比較だ。

国武氏によると、「大型石刃・小型石刃・大型の尖頭器」の3種のセットは、アフリカを出た新人がユーラシア大陸に入り、西から東へ拡散していく時に持っていた石器の組み合わせという。言い換えると、大陸で後期旧石器時代が始まった時の最古の石器の組み合わせである。



香坂山遺跡で見つかった最大の尖頭器（長さ12センチ）。二つに割れており、別々の場所で見つかった＝長野県佐久市で2020年8月19日、伊藤和史撮影

その時期と地域は、おおよそで中東（レバント＝4万8000年前）、中央アジア（4万5000年前）、中国北部（4万4000年前）、朝鮮半島（4万2000年前）などと時代を下りながらつながってゆき、それぞれ同じ内容の石器のセットが見つかった。

それと同じ3種セットが今回見つかったわけだ。そこで、焦点となるのが遺跡の年代である。

これまで香坂山遺跡の年代は3万6000年前とされてきたので、朝鮮半島の同種の遺跡とは6000年の時間差があり、やや離れている。今回、高精度の年代測定によって年代がさかのぼることになれば、時間の溝が縮まる。

カザフスタンやタジキスタンなどユーラシア大陸での発掘も行ってきた国武氏は

「レバントから韓半島まで、東に行くほど

年代は新しくなるけれど、隣接地域には1000～2000年くらいで伝わっている。新人は海は自由に渡っていたので、大陸の端の韓半島から日本列島にやって来るのに6000年もかかるとは思えなかった。それで、今回の調査で年代がさかのぼれば、新人がユーラシア大陸をずっと横断していく流れの中に、日本列島の旧石器時代が（スムーズに）位置づけられることになる」と解説する。

磨製石斧も登場 列島最古か

もう一つ注目すべき発見がある。日本列島の後期旧石器時代初頭に特徴的に存在する「局部磨製石斧（きょくぶませいせきふ）」も見つかったことだ。刃先の一部を磨いた石斧（いしおの）で、世界でも旧石器時代の磨製石斧は日本列島以外には一、二の例しかない。これも年代測定の結果によるが、列島内でこれまで見つかった局所磨製石斧の中の最古となる可能性が高い。

こ



タジキスタンのフッジ遺跡で出土した大型石刃（左の2点）と大型尖頭器。香坂山遺跡の出土石器との共通性が興味深い＝国武貞克氏提供



香坂山遺跡で出土した局部磨製石斧（長さ14センチ）を持つ国武貞克・奈良文化財研究所主任研究員＝長野県佐久市で2020年8月19日、伊藤和史撮影

局部磨製石斧はユーラシアを横断してきた新人の石器のセットには入っていないが、新人たちは動物骨などを磨いて道具を作る技術は持っていた。このため、大陸に比べて森林が発達していた日本列島にやって来た新人が、樹木の伐採に適した厚手の斧（おの）を作ろうとしたという見解が有力だ。新しい土地に到達し、早くもその自然特性に適応した新しい道具を作り始めたというわけだ。ユーラシア共通の新人文化と、日本列島で特殊化した新人文化が共存していると評価でき、興味深い。

旧石器時代の初頭は多様な姿か



香坂山遺跡で大型の石刃が出土した状況＝長野県佐久市で2020年8月19日、伊藤和史撮影

日本列島には約3万8000～7000年前の最古級の年代を示す遺跡がいくつかあるが、いずれも石刃を伴っていない。こうした事例と今回の発見から、大陸からやってきた同じ新人にもいくつかの系譜があった可能性がある。これとは違う学説もあって、研究上の大きな焦点になっている。

国武氏が考えているのは、「後期旧石器時代初頭の姿は多様だったのではないか」ということである。「ひととおりの人たちがやって来て、一斉に散っていったというより、多少違う文化を持った人たちが、最初期の段階から何回か来ているのではないか」。ただ、その後の文化につながっていくのは、今回見つかった「ユーラシア本流」と呼べる伝統ではないかという。

国武氏は「日本列島に最初にやってきた人、ホモサピエンスの姿が香坂山で見えてきた。新人が大きな石刃を携えて、ユーラシアを横断していき、その流れの中に日本列島の旧石器時代も位置づけられ

る。これほどユーラシアの文化と共通性を持つ遺跡は日本にはなく、ユーラシアを横断した新人の一番古い文化の本流が来ているように見える。さらに、ユーラシアの伝統的な文化と、石斧という日本列島化された最古のものが同居している。それが日本列島の最古の段階だったのではないか。今後の後期旧石器時代初頭を研究するうえで、非常に重要になる遺跡だと思う」と話している。

人里離れた、思いもよらぬ場所から



ズームによる現地説明会で紹介された上空からの香坂山遺跡の画面。人里離れた山中である立地がよくわかる = 2020年8月25日、伊藤和史撮影

ところで、香坂山遺跡は、ここからさほど遠くない観光地、軽井沢の喧噪（けんそう）などはまるで届かない人里離れた山中に立地する。高速道路のトンネル工事が行われて、初めて遺跡とわかった場所だ。いわば、偶然の発見。

こうした従来遺跡が多数見つかる平地とは異なる立地について、国武氏とともに調査に当たる堤隆・浅間縄文ミュージアム館長は「選地が違う。山岳部や高原地帯を選

んで遊動している。どういう（生存）戦略だったのか。（公共工事などに伴う通常の）緊急調査では当たらない場所です。日本列島でのホモサピエンス出現期の環境がどのようなものか、新しい視点が重要になる」と、初期列島人の暮らしぶりを考える。思わぬ山中に、同様の古い遺跡がいくつも人知れず眠っているのだろうか。

須藤隆司・明治大黒曜石研究センター特別嘱託によると、氷期だった当時、この遺跡一帯は森林限界より高く、大平原になっていて、オオツノジカやナウマンゾウといった大型草食動物の食料資源が豊富だったとみられるという。

国武氏は「大陸の草原環境に似ていたのでしょう。持っている技術が使える、自分たちが得意な環境で暮らしていったのだと思う。たまたまではなく、日本列島を知り尽くしたうえで、必然性があってここにやって来た。その必然的な理由を解明していきたい」と話した。

発掘は9月も続けられる。その成果が期待される一方、焦点となる年代を決める炭化物も十分に採取されており、測定結果が待たれる。【伊藤和史】

毎日新聞のニュースサイトに掲載の記事・写真・図表など無断転載を禁止します。著作権は毎日新聞社またはその情報提供者に属します。画像データは（株）フォーカスシステムズの電子透かし「acuagraphy」により著作権情報を確認できるようになっています。

Copyright THE MAINICHI NEWSPAPERS. All rights reserved.